〔シンポジウム　巡礼と文学〕

遍路と文学――『闇の奥』における旅と物語

田久保　浩

聖地を巡礼するという習慣は、宗教、および洋の東西を超えて長い歴史を持つ伝統である。キリスト教圏には、エルサレム、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、ルルド、カンタベリー、その他の巡礼があり、日本においても四国八十八か所遍路、伊勢参り、西国三十三か所めぐりなど様々な遍路路が残っている。インドのガンジス、イスラムのメッカ巡礼も有名である。聖地を訪ねるという特別な経験が、日常と離れた経験としてそれまでの日常見直すきっかけになるという意味があるということで特別な役割を与えられてきたものであろう。

ここでは、「巡礼」を、宗教、宗派を超えて、日常を離れた、何らかの精神的目的性をもった旅と定義して話を進める。この旅の行程が人生の縮図として捉えられ、旅、旅人、祈り、そして旅人の語る物語が互いに結び付けられるという構想において画期的であったのは、チョーサーの『カンタベリー物語』である。ロンドン近郊の宿屋で一晩を共にしたカンタベリー大聖堂へと向かう巡礼者たちは、宿屋の主人の提案で、大聖堂までの道中、歩きながら各自知っている話をほかの巡礼者たちに語って聞かせることにする。道中を共にする一行は、騎士もいれば、尼僧院長、地主、免罪符売り、商人、医者、大工、粉ひき屋など、身分の異なるさまざまな人々がいて、それぞれの話を披露する。たとえば、騎士はギリシャの高貴な若者たちを巡る恋と闘いのドラマを高らかに称える話であるのに対して、粉ひき屋の話は実生活でのけんか相手でもある大工についての話で、その大工がいい年をしながら若い嫁さんをもらったために、ひどい目に合うという滑稽な話である。一方、五回の結婚を経験したバースの女房は、アーサー王伝説を題材にしながらも、男にとって妻の言うことに従うことが幸福の秘訣であるという、彼女自身が信条としていると思われ

る教訓を含んだ話を聞かせる。

各巡礼者は各自の関心のある物事にかかわり、それぞれの生活観に根ざした話を次々と披露する。各巡礼者が語る物語は彼らの人生と密接な関係性を持ち、話を紡ぐことが人生の営みであり、かつこうしたさまざまな人々の人生の総体が、人々がたどってきた巡礼の旅の足跡なのだという壮大な作品全体の構想につらなっている。チョーサーが「イギリス文学の父」と称されるゆえんである。同様に旅が題材となり、〈語る〉という行為そのものが主題となっている作品として、本論においてはジョセフ・コンラッドの『闇の奥』に焦点を当てる。

語り手、旅、物語の密接な関係により成り立ち、『闇の奥』と同じく航海をモチーフとした作品としては、コールリッジの「老水夫行」がある。「老水夫行」は、南洋、南氷洋への航海の話、『闇の奥』はコンゴ川をさかのぼりジャングルの奥地を目指す話で、両作品に共通するのは、語り手が自らの旅の経験を人に語らずにはいられないという設定である。

「早く言え」と聖者は云う。
「いったいおまえは何者か？」
たちまちに私のこの肢体はねじられて
つらい苦しみに悶える
私は語らずにはいられない
そしてやっと解放される。

それ以来、いつともしれず
あるときは頻繁に、また時折に
あの苦しみが襲い私に語らせる
あの恐ろしい冒険の話を

わたしは、夜の闇の如く、土地から土地へと渡り
不思議な話の力を持ち、
その人の顔を見た時に
話を聞くべき人がわかる。
そしてその人に私の話を教えるのだ。

（六一一～六二三行）

老水夫は「その人に私の話を教えるのだ」と言うがその話とは何か。興味深いことに「老水夫行」にせよ、『闇の奥』にせよ、そこからはっきりとした教訓や知恵は見いだせない。コールリッジは、「老水夫行」を書いて三十年以上も後になって、バーボールド夫人（詩人、批評家）から、こ

の詩をとても素晴らしい詩と思っているのですが、欠点は道徳的な教訓がないことですね、と言われたという話を紹介している。これに対し彼はこう答えた、「私の考えるところでは、この詩は、教訓がありすぎるのが問題で、この詩の唯一の欠点は、このような純粋な想像力の作品にもかかわらず、読者に対して行動の原理についての道徳的な感情があからさまに感じられてしまうことです」[1]。「老水夫行」の物語は、ある一人の水夫が南半球へと航海する船に乗り組み、最初は順調に航海を続けたものの、あるとき、船に飛んできて船員たちから餌をもらったりしていたアホウドリを弓で射殺してしまう。その後船は、太平洋の無風地帯で動けなくなり、船員たちはすべて死んでゆく。しかし船上から夜に、うろこをきらきら光らせて海中に舞うウミヘビの姿に感動した老水夫は、それまでできなかった〈祈る〉という行為ができるようになる。その後、不思議なことに船員たちが生き返り、船を操作し、故郷の港に帰り着くが、港の沖で、迎えに来た水先案内人の乗船者には幽霊船のような姿に見えたその船はたちまちのうちに沈没し、なぜか老水夫のみが助かるという話である。生きながらえた老水夫は、出会う人が話を聞くべき人であると直感すると不思議な力でその人を引き留め、自分の話を聞かせるのというのが先の引用である。コールリッジの言葉からわかるのは、彼は老水夫の生き物への殺傷と救いの物語を、たとえば人間の原罪、そして祈りをイエスによる恩寵とするような道徳的な主題としては全く意図していないということである。

『闇の奥』でマーロウが繰り返すのは、コンゴでの経験から文明によっても決して晴れることのない人間の闇を知ってしまったということである。ヨーロッパ的教養を備え、アフリカの現地民を文明化しようという理想を持っていた男カーツが底知れぬ「暗黒」にとらわれ、狂気の中で死んでゆくという話であるが、老水夫の話と同じくマーロウのアフリカの話でもけっして面白おかしい話でも、興味をそそる話でもない。しかし「老水夫行」において、老水夫に呼び止められた婚礼の客は結局、話を最後まで聞くことになり、婚礼の宴に出ることができない。また『闇の奥』において、最後を締めくくる語り手は、引き潮を待つ間、マーロウの話を聞くつもりでいたヨットの一行は、とりとめのないマーロウの話を聞きながら、結局、引き潮を逃して聞き続けてしまう。これは、物語というのは人を楽しませたり、あるいは教訓を与えたりする以外の働きがあることを示唆する。つまり、人はなぜ、物語を求めるのかという文学の根本問題がここで示されているのである。

『闇の奥』は、引き潮とともに沖へ出るのを待つあいだ

テムズ川河口に停泊するヨットに数名の乗船者とともに乗り合わせた第一の語り手が、船のオーナーかつ船長である社長、弁護士、会計士らとともに、彼らにとって長年のなじみと思われる船乗りマーロウの語る話を聞くというフレーム・ナラティブ（入れ子構成の物語）として語られる。その目的には自分の経験と考えを語るマーロウという人物の特別な性格を作品の重要な要素としているということが挙げられる。マーロウは、小マストを背にあぐらをかき、両手の手のひらを上向きにして下におろし仏像のような姿で座っている。「ヨーロッパ人の服を着て蓮の花なしに説話をするブッダの姿」と形容される。ヨーロッパ文明の外側からの視点で、ある種の精神的求道者が語っているということが示唆される。この人物が語る物語が作品の中心であるが、それは物語の筋と展開により読者の関心をとらえることを目的としているのではない。マーロウ自身が彼の経験した出来事を語るなかで、カーツとの遭遇の意味を理解しようとするのである。その理解の過程を名のない第一の語り手はただ伝える。読者は実際のところ、この「ブッダ」と形容される神秘をまとった人物の語るとりとめのない感想に耳を傾けるのみである。そして、コールリッジの「老水夫行」で老水夫が婚礼の宴会へと急ぐ客を引き留めて彼の不思議な経験を聞かせたように、『闇の奥』の語り手は、マーロウが語り始めるやいなやヨットの一行は彼の「結末のない経験」を最後まで聞くことになると観念するのである。

しかも、『闇の奥』の第一の語り手がマーロウの語り方について紹介する際に、この作品のもっとも注目すべき言葉がある。

> 船乗りたちの話には直接的な単純さがある。全体の意味は割ったクルミの殻の中にすぐに手に取れる。しかしマーロウは、彼の話好きな点を除けば、ほかの船乗りとは異なっている。彼にとっての一つの話の意味とは、クルミの実のように、殻の内側にあるのではなく、外側にあるのだ。それは月光が屈折して霧が光輪のように目に映るように、光が霧を浮き立たせるように物語を包み込むのだ。[2]（五）

つまり、話の中身自体は霧のように空疎なもので、意味はそれに外側から輪郭を与える光のほうにあるということである。話の外側にある光とは何か。それは物語を語る語り手か、あるいはその話を理解しようとする聞き手のことか。

「巡礼」の旅に欠かせない要素は、その目的地である。マーロウにとっての目的地はカーツという人物である。しかし

マーロウがこの人物のことを知るのはかれがコンゴ川での蒸気船の船長の職を志願し、そこに到達した後のことである。コンゴ川下流の事業所に着いて初めて、会計士から、そして一等事務員からカーツのことを聞き、その存在が徐々にマーロウの中で大きくなってゆく。この作品をめぐる大きな謎は、そもそもなぜマーロウはカーツに関心を持ったのかという点である。事業所の関係者たちからはふたりともアフリカのネイティブたちに対する理想主義を共有するとみなされ、煙たがれる。しかしカーツが本当に理想を持っていたかは定かではない。マーロウが手に取ったカーツの手稿には、ヨーロッパ人は先住民たちからある種の威光のある存在として指導的な立場を取らねばならぬと述べて、マーロウを唖然とさせるのである。さらにそこにはあとから殴り書きで「野蛮人たちを皆殺しにせよ」と書かれてあったことが述べられているが、その論文の内容がマーロウの口から語られることはない。カーツは象牙を獲得するために部族民に対して自分をカリスマ崇拝するように仕向け、他部族を襲撃して象牙を略奪するという理想主義とは正反対の行動をとっていた。

一方マーロウは、一見、アフリカ人を見下したような口ぶりをするが（もっともヨーロッパ人に対してはそれ以上の軽蔑を示す）、カーツが部落の住民たちに命じ、マーロウの乗る会社の蒸気船を襲撃し、退散させようとした時、不幸にもマーロウの舵取りの助手をしていたアフリカ人に矢が命中し、命を落とす際にマーロウはひどく動揺して、血にまみれた新品の靴を捨ててしまう。これは、恐怖によるのではなく、彼が「ある種の仲間同士だったのだ」と述べる通り、アフリカ人の青年に気持ちのつながりを感じていたからであり、非情に部族の中の一部のものを反逆者として処刑するカーツとは対比を成す（五〇―五一）。

また、マーロウにとってカーツは雄弁に語る存在として思い描かれる。しかしながら、マーロウが直接にカーツの声を聴くのは、カーツが重い病に侵されて部族長の家で臥せっていたところをマーロウの蒸気船に収容したにもかかわらず、深夜そこから抜け出してしまったときである。カーツは部族のもとに帰ろうとし、マーロウは必至の思いで彼を蒸気船に連れ戻すため、暗闇で短いやりとりをする。カーツはまもなく、有名な「あの恐怖！　あの恐怖！」という短い言葉を残して息を引き取る。

ところで『闇の奥』において、マーロウが「巡礼者たち」と皮肉な呼び方をする人々がいる。彼らは誰か。出張所に勤める社員たちのことである。なぜマーロウは彼らを「巡礼者」と呼ぶのか。彼らはみな長い杖をもち、出張所の敷地内をうろうろと歩いているからだが、彼らが「巡礼」の

目的とするものは何か。それは象牙であり、金である。象牙を取引できる川の上流の基地に赴任して象牙の取引で手数料を稼げるようになることが目標である。マーロウは彼らには皆「愚かな強欲さのにおいが付きまとう……このような非現実的なものは今まで見たことがない」と嫌悪感をあらわにする。一方、同じく象牙に執着して、自分を崇拝させた部族民たちを率いて周辺の部族を襲い、象牙を強奪していたカーツについては、「闇の奥」を覗いた者としてまったく別の感情を抱く。ヨーロッパの教養人としての資質を備え、アフリカの現地人を文明化しようという理想をもち、なおかつ、コンゴ川最奥地の出張所でだれよりも多くの象牙を集め、ヨーロッパ本社から注目を集める存在に対して、マーロウは興味を覚える。

カーツのような理想を持った社員が会社のアフリカ現地責任者になれば、ひどい現地人搾取や非人道的行為がなくなると思ったようである。「私はこの男がある種の道徳的な考えをもって、会社のトップに立てば、どのような仕事をするか見てみたいと思った」(三一)。マーロウは、所長や「巡礼者」たちとともに蒸気船でカーツをもとめてコンゴ川をさかのぼり、千六百キロにも及ぶ旅をすることになるが、旅の中でカーツの存在はどんどん大きくなってゆく。「私にとって船がのろのろ進んでいたのは、カーツに向かうそれのみのためだった」(三五)。カーツに会うための旅がマーロウにとっての巡礼となる。

それは同時に人間としての起源にさかのぼる旅でもある。「この川をさかのぼることは世界の原初へとさかのぼる旅だ。地上に植生がはびこり、巨大な樹木が王様だった時代だ。空白の水の流れ、大いなる静寂、底知れぬ森へと」(三三)。原初の森、ジャングルの奥の闇は、同時にカーツの心の奥の闇、人間の心の奥の闇であることがわかってくる。部族のカリスマとして崇拝されるカーツは、心身とも病み、部族の土壁の住居から船で帰すため担架で担ぎ出されなくてはならなかった。しかしこうして船に乗せられたカーツは夜の闇に紛れ、マーロウやほかの乗組員たちがうとうとしたすきに抜け出して、深い草むらをかき分け、かがり火が燃える自分に従う部族のもとに戻ろうとする。マーロウが追いつき連れ戻そうとするのに対し「私には大いなる計画があった」と抵抗する。マーロウの冒険における最大の危機であり、彼が最大のショックに直面する場面である。「道徳的なショックを受けたのだ、まるで何かまったく醜く考えに堪えないような、魂にとって醜悪なものが、不意に私に突き付けられたのだ」。

近代ヨーロッパの知性と教養をそなえた人間がジャングルで理性を失う姿に彼は衝撃を受ける。単なる蛮行や残虐

さならむしろ安心だと言う。より恐ろしいものとして、マーロウは人の理性を見失わせる闇の力についてこう述べる。「私はその呪文を破ろうとした。それは密林のもつ重たい沈黙の呪文であった。それは彼を忘れていた残酷な本能を目覚めさせることでその情け容赦ない深みへと彼を引き込もうとしていたようだった。魔物のような熱情で満たされる記憶を呼び起こすことで」（六五―六六）。マーロウの恐怖は、理性、知性、教養、理想といったものが、人間の奥深くに潜む本能にとっていかに危ういものかということを実感したことから来るものであろう。

実は、マーロウがヨットの乗船員たちに自分のアフリカでの話を聞かせる際、こう話し始める、「ここも同じく、地上の暗黒の場所の一つだったのだ」。奇妙なことに彼は、二千年前、このヨットが停泊するテムズ川河口にローマ帝国の植民地開拓のために派遣されたローマ軍兵士の話から始めるのである。

彼のことを想像してみてくれ、世界の果てなんだ。鉛色をした海、空は煙のような色をして、コンチェルティーナ（六角アコーディオン）ほどにもろい船に乗り、支給品や備品みたいなものを携えて川を上る。砂丘、沼地、森林、野蛮人。文明人の口に合うものはほとんどない。テムズ川の水しか飲み水がない。イタリアのワインもないし、上陸もできない。あちこちで軍の前線基地は原生林の中に埋もれてゆく、干し草の束の中に落ちた針のように。寒さ、霧、嵐、病気、脱走者と死。死は空気にも、水にも藪にも潜んでいる。彼らはここで蠅のように死んでいったことだろう。（六）

ここでローマ軍兵士たちが植民地の環境に合わず死んでゆく様子は、アフリカで、疫病等で次々と死んでゆくヨーロッパ人植民者たちの様子に重なるように描かれている。イギリスもアフリカと同じようにかつては暗黒の地であったということである。つまりヨーロッパ人が野蛮人と見下しているアフリカ人たちと二千年前のイギリス人は同等の存在としてたとえられているのである。この譬えの枠組みから見ると、ヨーロッパの洗練された教養を備えたカーツがアフリカのジャングルで暗黒に取り込まれ理性を失う『闇の奥』という物語の主題は、二千年の時を経て、ヨーロッパ人の心の中もアフリカ人と同様、暗黒が支配するという事実である。それは欲望にかられてアフリカを暴力的に支配し、残虐な植民地略奪を行うヨーロッパ人は何千年も変わらず野蛮人のままであるという現実である。

しかしこの主題自体は先に触れたクルミの殻の中身にす

ぎない。物語はこのままでは、単に十九世紀末のヨーロッパ植民地主義を糾弾するだけで、多くの読者には無関係な話で終わってしまう。コンラッドの『闇の奥』を重要な作品にしているのは、先に触れた巧妙な語りの働きによるものである。ここに本題の、クルミの殻の外側にある意味とは何かという問題がある。物語は求道者の風采をまとい自らの経験について、それをどう理解したらよいかを模索しながら言葉を模索する語り手マーロウの言葉を第一の語り手が紹介するという方法をとるが、マーロウはあらかじめ、自分の話が、クルミの殻の中の実のようにはっきりとしたものがあるわけではないと断わっている。「それはかなり暗いものだ。そして悲しいものだ。けっして注目を浴びるようなものではなく、また、あまりはっきりとしないものである。あまりはっきりとしないのだ。それでもある種の光を当ててくれるように思う」（七）。マーロウの話はカーツとの遭遇と彼の死をドラマのクライマックスにおいてそれを引き立たせるように話をおぜん立てするという形はとらない。マーロウの話は、いかに自分がアフリカ行きに至ったかということから始めて、自分の内面を探ることに主眼がある。すると第一の語り手を通して読者はマーロウの心の奥底にあるものを理解しようという行為―「巡礼」―に参加することになり、この段階でカーツの物語は一つわきに置かれるのである。

　マーロウがカーツをもとめてコンゴ川をさかのぼる話は旅行記ではなく、彼の思考上のポイントをたどるものなので、千六百キロにも及ぶ旅の進行を順にたどることはしない。下流の営業所本部でカーツについての他の社員たちから聞いたこと、自分の期待することがどう変わったかということが物語の中心である。下流の会社営業部内で人々がカーツについて話すこと、カーツに出会う話の前に、のちに知ったカーツによる「野蛮習俗撲滅国際協会」のための報告書も引用しながら、また、ロシア人青年の話を紹介しながらカーツが部族民たちに自分を崇拝させて周辺部族への収奪行為を行っていた経過を紹介する。こうした話の後で初めてカーツとの出会いが語られる。

　カーツに出会う前の最も大きな出来事は、カーツが発見される前線の出張所跡の少し下流で、船が部族の弓矢の襲撃を受ける事件である。この際に、開いていた操舵室の鎧戸の窓を通って飛んできた槍に刺されてマーロウの助手であるアフリカ人の操舵手が死ぬ。この襲撃で、当然カーツも同じ部族に殺されたものと考えたマーロウは、それまで募っていたカーツと会う希望が絶たれ、深く失望するが、同時に自分が思いをはせてきたカーツに対する関心の本質について、このような理解に至る。

……それこそがまさに自分が待ち望んできたことだった。カーツと話をすること。私はこの奇妙な発見に至った。自分がこれまで彼が何かしている姿を思い描いたことはなかった。彼はただ語る存在であったという発見に。（四七）

マーロウはカーツのことを話をする存在、物を語る存在として思い描いていたというのだが、しかしカーツはいったい何を語るのだろうか。マーロウは、カーツの雄弁さ、声の響き、強さ、表現力について繰り返し言及するが、興味深いことに、カーツの話した内容は驚くほど少ない。その中でもっとも印象的かつ、コンラッドの作品で一番有名な言葉は、カーツが息を引き取る前、最後に残した言葉 "The horror! The horror!"（あの恐怖！　あの恐怖！）である。しかし一体それは何の恐怖だったのだろうか。おそらくマーロウ自身にもその恐怖を直接説明する言葉はない。マーロウは彼を魅了したカーツの「声」というものについて、こう述べる。

声だ。彼は単なる声に過ぎなかったのだ。そして私は彼の声を聞いた……それを……その声、そして別の声、すべて声に過ぎなかった。そしてその時期の思い出全体が私を取り囲むとらえようのない、消えゆく大きなおしゃべりのひびきのような形で残っている。ばかげた、残忍な、汚れた、野蛮な、あるいは単につまらない、意味のないものとして。（四八）

この「声」とは何だったのか。このとらえどころなく、「意味のないもの」をなぜマーロウは語ろうとするのか。彼はカーツのことを深い闇と対峙するという極限のところまで近づいた者と考えている。そして自らそれを理解しようとして、ロシア人青年、所長や社員たちの言葉と自分の見たものとをつなぎ合わせて語ろうとする。カーツが見た闇の深さに至るためにマーロウは海で知り合った仲間に自分の言葉を伝えようとする。そしてそれを第一の語り手が読者に伝える。するとこう整理することができる。カーツが自らの理想と野望を持って最初にコンゴ川を上ったのが第一の遍路とすれば、マーロウがカーツを求めてコンゴ川をさかのぼったのが、第二の遍路、そして自分の経験の意味を探るためマーロウが仲間たちへ語った行為は第三の遍路、そして第一の語り手がマーロウの言葉を紹介することによって、読者たちは自分たちもやはりカーツの見た闇を探る自分たちの遍路を始める。それが第四の遍路と言えるだ

ろう。第一の語り手は物語をこう締めくくる。

> 海の沖は雲の黒い壁で閉ざされていた。そして地球の果てまで続く静かな海路は曇った空の下暗く流れ、巨大な暗闇の奥へと導くようであった。（七七）

読者たちは、マーロウの話を通じてカーツの見た深い暗闇へと旅をする。その話を読み終わった読者は今度は、自分たちの生きる世界の暗闇に向かって旅を続けるのである。

マーロウの物語の前半、アフリカの河口の本部で彼は鎖につながれ荷役を背負わされ、病気で動けなくなった後、道端に捨てられ、そのまま死を迎えるアフリカ人の姿を描き、象牙と金銭への「巡礼者たち」の非人間的な闇を示唆する。一方で、暗闇で目隠しをされた美女の絵画を描き、アフリカの文明化についての論文を書く雄弁なカーツは、部族のカリスマとなり、従わないものの首を見せしめとして竿に刺して飾のように門前に並べる。ここでは文明対非文明という対立項は存在しない。まったく価値観を失い、進むべき方向を見失った闇の中にマーロウは閉ざされているのである。一方、カーツの遺稿を届けるため、彼の許嫁を訪ねたマーロウは、カーツの理想ないし幻想を抱き続ける女性に対し、カーツが最後に口にした「あの恐怖、あの恐怖」という言葉を伝えることが出来ず、嘘で口を濁す。つまりこの女性が象徴するヨーロッパ文明全体も真実の光が届かない闇の中にあることを物語っている。カーツをカリスマとする部落でカーツに愛人のように付き添うアフリカ人女性と、このベルギーの許嫁とがマーロウにより並べられて語られることも興味深い。このようにどの方向にも光のない深い闇の中にあってマーロウは、自ら進んで闇の中に身を投じて滅んでゆくかに見えるカーツに魅力を感じる。まったくとらえようもない経験に出会って、マーロウにできることは、何を語るかもわからないまま語り続けることだけである。マーロウが語るべき闇の正体は決して明確にはならず、それを知るためにマーロウは語り続け、読者は読み続ける。ここにクルミの殻の外側にある意味を伝えるということを理解するためのヒントがある。

それはピーター・ブルックスが論じるようにこの小説を「物語というよりも語りの行為そのもの」として理解するということである[3]。このことが同時に意味することは、マーロウにとってのカーツとは彼の語る物語によって、語るという行為によって作られた存在であり、カーツがとらえどころのない存在であるのは、彼がマーロウ自身の経験したとらえどころのない経験を語るという行為の中で作られた存在だからである。この語るという行為に参加することで

読者は自分の周りも不可思議な闇で包まれていることを理解する。かつて、日本の四国の地域には大勢のハンセン病の患者たちが救いを求めて遍路に訪れた。伝統的に遍路の目的はほかに治療の方法のない病を癒すためである。大勢の人々は、言い伝えられた信仰に希望を託し、病が癒えるのを願って旅をつづけ、その中で死を迎える。人は人生のさまざまな疑問と出会い、その意味を求めて物語をつづり、それを人は読み続ける。しかし決して直接的な答えや解決はみつからない。人は物語を「読み解く」ことを求める。しかし旅は決して直接的には人生の解答を与えない。同様にわれわれは物語から明快な答えを求めることはできない。ただ新たな話を求め続けるのみである。コンラッドの作品が読者につきつけるのは、そうした人と物語とのかかわりの問題である。

(注)

(1) S. T. Coleridge, *Specimens of the Table Talk of the Late Samuel Taylor Coleridge*, Vol.1 (John Murray, 1835), pp. 154-156.

(2) 本稿において用いた『闇の奥』のテクストは、次のノートン版からの拙訳である。括弧にはこの版のページ番号を記した。Joseph Conrad, *Heart of Darkness*, Fifth edition, ed. Paul B. Armstrong (Norton, 2017).

(3) Peter Brooks, *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative* (Harvard UP, 1984), p. 261.

*本稿は二〇一八年五月一二日、四国大学において行われた日本キリスト教文学会第四七回全国大会シンポジウム「文学と巡礼」における発題原稿について、他の発題者およびフロアからの発言を受けて加筆、書き直しをしたものである。シンポジウムの討議に加わっていただいた参加者全員に感謝を述べたい。